

第10回 協働のまちづくり推進特別委員会記録

令和5年3月3日（金）

開議 13時 00分

閉議 15時 33分

全員協議会室

- 【委員】 西田委員長、上野副委員長
村木委員、村武委員、柳楽委員、岡本委員、芦谷委員、川神委員
- 【議長・委員外議員】 笹田議長
- 【執行部】 邊地域政策部長、末岡地域活動支援課長
永田まちづくり社会教育課長
- 【事務局】 河上局長
-

議 題

- 1 執行部との意見交換
 - (1) これまでの協働のまちづくりのまとめについて
 - (2) その他
- 2 中間報告作成について 【委員のみ】
- 3 その他

【別紙会議録のとおり】

【会議録】

[13 時 00 分 開議]

西田委員長

第10回協働のまちづくり推進特別委員会を開会する。出席委員は8名で定足数に達している。早速レジュメに沿って進める。今日は執行部との意見交換会ということで、部課長それぞれ出席いただき感謝する。協働のまちづくりは執行部も議会も同じ立場、同じ市民として腹の中から思った意見を出し合って進めていく、お互いの立場を尊重し合いつつ進めることも大事だと思っている。

これまで当委員会ではまちづくりセンターを訪問したりコーディネーターとの意見交換をしたり、また執行部とも意見交換したりしている。当委員会が発足して約1年が経過した。今日は執行部と我々と思ったところの意見を交換したい。前回の開催時、執行部との意見交換に当たりテーマを決めたほうがよいとのことで正副委員長と事務局とで一応テーマをつくった。それに基づいて意見交換したい。

一つ目のテーマは公民館からまちづくりセンターに変わって何がどう変わったか。二つ目は協働のまちづくりのゴール。協働のまちづくりはどこまでいけば達成できたと思われるのか。三つ目は地域活動を推進するための人材育成について。一つのテーマにつき20分から30分くらいでやりたい。

1 執行部との意見交換

(1) これまでの協働のまちづくりのまとめについて

西田委員長

まず、公民館からまちづくりセンターになって何が変わったか。委員は一人ずつ、感想なり意見をお願いする。

岡本委員

私の地域、浜田まちづくりセンター管内は非常にまちづくりが遅れている地域であり、直接的に活動してきた。執行部にもコーディネーターにもいろいろな形で協力してもらった。公民館からまちづくりセンターにどう変わったか、私から感想を述べたい。

浜田公民館は貸館業務がベースであり、教育委員会と連携して共育などいろいろされていたが、まちづくりについてはかかわりがなかった。現在はまちづくりセンターという位置づけで、単一町内の行政連絡員、イコール町内会長なのだが、そちらに向けて回覧などを届けることでいろいろ情報をもらったりして、今までよりも密な関係でやっている。貸館業務からアクションをかけるまちづくりへと変わっている。現在進行形であり、町内同士でもなかなか折り合いがつかない状況があるので、まちづくりセンター職員は上手につながっていただいている。この人たちの活動を通して、町内でまとめようと今進めている。

村木委員

私から見たまちづくりセンターは、受動態から能動態に変わったという認識である。

公民館がやってきたことはその地域の将来像の実現にかかわる人づくりを担ってきたと思っている。それがまちづくりセンターに変わったら、さらに実践や活動することでその地域の将来像を実現させること、それを支援するふうになっていったというか、さらに延長線上にあると思っている。手元の図で説明すると左から右に流れるのだが、まずは集まって学んでつなぐのがもともとの公民館機能である。そこに活動と実践というまちづくりを入れ、地域の拠点になっていたのかと思う。地区まちづくり計画は決して分厚い計画書ではなく、生涯学習の機運を醸成し、そこにはふるさと郷育や、はまだっ子共育、家庭教育支援、地域の課題解決。赤いところは令和2年2月にできた社会教育推進計画を書いている。社会教育法に基づく社会教育事業をやっていく中でさらに実践・活動していく、そして目指すビジョンに近づくこと、それを最初から最後までやれるのがまちづくりセンターだと思っている。

予算も当時は活動費や教育費のみだったが、場合によってはまちづくり交付金も活用できると聞いている。さらに人員も主事2人体制になった。教育における学校と子どもをつなぐところと併せて地域住民主体のまちづくりに向けた支援・調整を行っていく。それぞれのコーディネート力を生かしていく。それもまちづくりセンターに変わってからの大きな前進かと思っている。公民館の活動の延長上がまちづくりセンターとまとめさせてもらった。

村武委員

公民館からまちづくりセンターに向けて変わったところもあれば変わってないセンターもあるのでは。変わってないセンターとは例えば、公民館時代から公民館事業、社会教育をしながらまちの課題に向けて、まちづくり組織にかかわって活動しているところもあったので、そういう意味では変わってないセンターになるのかと思う。変わったセンターとなると、まちづくりと連携してそこを意識して活動できてなかったのが、そこを意識してやることを実践しているまちづくりセンターもあるかと思う。

あと一つ変わってないところは、今までまちづくりのことをあまり考えてなかったけれど、センターになってもどうしたらいいのかわからず、名前は変わったが中身があまり変わってないというセンターもあると思っている。この3種類かと思う。

公民館に目的を持って集まった方々の活動が地域還元したりまちづくりにつながったりすると思う。それと、集って話し合うということを私が公民館職員時代にやっていた。住民は自分が思っていることをすぐに話すことが難しかったり不慣れだったりする。そういったことができるようにするためにも、公民館に集って話

し合う場を提供していた。そういうことをしていると公民館に地域課題が集まってくるので、その課題に向けてどうしたらいいのか、今度はそれをまちづくり組織に投げかけて課題解決していくということなのかと思う。そういったことをしていくのだが、センターによってはどのようにまちづくりにつなげていけばいいのか分からない職員もおられるように感じる。

公民館時代も、毎年度初めに計画書をつくっていた。センターになった今も多分つくっていると思う。その計画書をつくるに当たっても、この地域ではこうしていきたいから、そのためにセンター事業はこのようなことをしていこうとか、きちんと考えられて計画書もつくって進めていかないといけないと思うが、それがどの程度できているのかと少し感じている。

私の地域にもまちづくり組織はあるが、町内会長が集まる感じでできていて、まちづくりをやっていくといっても進めるのが難しい方が多いのだと思う。リーダーもなかなかいないので、どうしたらよいかわからないまま進めていくところで、まちづくりコーディネーターやまちづくりセンター職員がかかわってアドバイスしたりするべきなのだろうが、それが機能しているのだろうかと思う。

センターによっては規模が大きいので、細かいところまで入り切れてないといった課題もあると思う。

川神委員

基本的には、うちの場合は石見まちづくりセンターと並列して長沢公民館などの自治公民館があって、運営形態というか取組意識が違う。石見まちづくりセンターは管轄が非常に広く、年に1、2回しか会わないような相手と話すことがある。エリアをどうするかは喫緊の課題だと思っている。変わった点があるとすると職員の意識がすごく変わったと思う。今までは貸館のみならずいろいろな企画もされていたが、さまざまなジャンルにかかわって、まちづくりをされる職員の企画力がかなりアップしている。つまりそれはほかの館の影響もあるかもしれないし、利用者のニーズに応えるためかもしれないが、子ども向け企画、親子向け企画が結構増えてきた。それによって日ごろ来なかったような方々が来館している。何でもそうだが、どこが変わったらどこが化学反応で変わるかがある。スタッフが変わると企画に表れたり、いろいろな事業に表れる。だから恐らく職員が変わって化学反応を起こしているのだろう。それはよいことだと思っている。ただ、私の周りでまちづくりセンターと呼んでいる人間は誰もいない。公民館としか言っていない。それをあえて変える必要はない。問題なのは協働のまちづくりを進めるためにまちづくりセンターが拠点となって人材育成に始まる。日ごろ会わない人間、課題をどう解決

するかという出会いの場所というのが一番なので、そういった意味では協働のまちづくりを唱えてまちづくりセンターに移行した、名前ではなく、きっかけとして化学反応が起こっているのは間違いないので、そういった意味ではよい方向へ行き始めている。しかし伝播速度が非常に遅い。それをどのように広げるかは大きな課題である。

西田委員長

私も特に何が変わったと気づくことはそれほどないが、今までの公民館からまちづくりセンターにグレードアップしたような気はしている。まちづくりセンター職員を含め、住民の意識が変わっていくことが一番大事である。先ほど岡本委員からも受動から能動へ変わったという言葉があったが、自分たちが主体的に地域のことを率先してやるという意識に、少しでも前向きになったのでは。

上野副委員長

私も長く公民館にいた。公民館とまちづくりセンター、変わったという意識は住民にはあまりないような気がする。ただ、それぞれのまちづくりセンターへ行って一番感じたのは、行政OBの方があまりかわらないという言い方をされたところはかなりあるが、旭のある公民館は行政を退職した人が積極的に動いておられる。その関係で、今までそこを訪れても人が集まっていることはめったになかったのだが、今はほとんど車が止まっている状態で、聞けば自然に集まるようになったと言われる。そこで恐らく、耕作放棄地で何かつくろうという話が出たのではないかと思う。そのときに補助金の申請などは行政OBの方がしっかりわかるので、県や国から補助金をもらって話が進んだのかと思う。

ガソリンスタンドの件にしても、いろいろな人が集まって、こういう話があるからどうにかしようではないかというのはやはり行政OBがリーダーになっていろいろなことが進んだ。見てもすごくよい形で動いている。これが本当のまちづくりの仕組みだという気がした。

ただ、先ほど話があったように全然変わってないところもある。役員が変わった関係でかえって行きにくくなったという声も一部聞いた。自然に来てもらえるような状況になれば、まちづくりは一番よい方向へ進む気がする。

柳楽委員

これまで公民館のときは社会教育や人材育成などを中心に取り組んで地域貢献してこられていたと思うが、そこにまちづくりが加わって、まちづくりセンターへのヒアリングの際にも協働のまちづくりについて住民に理解していただくのにすごく苦勞されていると感じた。ヒアリングから少し時間がたっているので、その後どうなっているかはわからないが、急に理解が進んでいることは考えられないので、ここは課題かと思う。執行部からの働きか

けも必要だろう。

周辺地域ではまちづくり関係の団体とつながりを持っている状況があったが、浜田地域も含めて協働のまちづくり、まちづくりを進めることに関して、センター職員の働きもあって少しずつ意識が高まってきていると感じる。

芦谷委員

1月13日の資料で7項目、自分なりの提言をしたつもりである。その中で三つほど、まちづくりセンターを地域の拠点にする、センターの職員体制なりコーディネーターを充実させる、そして、協働のまちづくりは総務系だけでなく生涯学習もあり地域福祉もある。だが、この場にスタッフが来ていない。行政の縦割りで総務系だけでやっているの、他分野が全く地域へ参加してない。つけ加えると、まちづくりセンター職員もコーディネーターも一生懸命やっているが、なかなか市から協働のまちづくりの大きな旗振りが無いから、それぞれが自分の思いでやっている。全体として前に進まない。その証拠にアンケートで「協働のまちづくりの意味がわからない」「参加したくない」という声がある。市役所の一部門だけの旗振りでやっているから、まず市全体のものにする。それを通じて地域の隅々に下ろすことが必要だと思った。

西田委員長

執行部との意見交換なので、思ったことをそのまま、感想なり何なり言ってもらいたい。

地域政策部長

最初に委員長からもあったように、自治区制度から協働のまちづくりに仕組みを変えて浜田市のまちづくりを進めていこうということで、令和3年4月に協働のまちづくり推進条例と、公民館のセンター化ということでまちづくりセンター条例をスタートさせ、新たなまちづくりが動き始めた。自治区制度から協働のまちづくりの推進に当たっては、公民館のセンター化だけではなく、中山間地域の重点的支援など、いろいろな取組の中の一つの仕組みということで、公民館のセンター化に取り組んだ。

これまでも何度か話してきたが、3年かけて評価検証する。令和5年度には評価検証を行って取りまとめ、直すべきところは直すよう見直しもしていきたい。

今、委員からいろいろなご意見をいただいた。よい意味で変わったところ、変わらないところもある。確かにセンターによって、地域とのかかわりによって状況が大きく違うというのも事実である。それらを踏まえて見直すべきところは見直していく必要がある。

公民館からまちづくりセンターへ変わって具体的な変化状況は執行部側でも整理しているので、執行部側から見た点を少し紹介したい。

まちづくり社会教育課長

公民館からまちづくりセンターへ変わって何が変わったか、変

わらずにいるかについて先ほどから委員のご意見を伺った。おっしゃったところを我々も感じている。基本的には公民館の役目をしっかり引き継ぎながら新たに協働のまちづくりの拠点機能を加えていく狙いがあった。公民館が培ってきた人材育成をしつつ、それを上手に地域につなげていくことを重点的にこれまで活動してきた。これまで公民館とまちづくりというところが、社会教育は教育部局でやってきたので、公民館時代になかなか公民館でやってこられたことが地域につながりにくかったところがあったかと思うが、センター化によって主事が地域の状況などを、一番行政で地域に近いところにおられる職員なので地域の状況はよくご存じなので、そういうところを踏まえながら課題を解決するための人づくりをやって、そこがうまくセンター化によってつながってきているのではないかと感じている。

浜田や石見のセンターのように貸館業務が多い館も、今ではしっかりまちづくりコーディネーターや市職員と一緒にまちづくり委員会設立の地域に出かけている。事例を紹介すると、浜田まちづくりセンターでは「てごセンター」ということで町内会活動の手伝いをするというチラシをつくって、各町内会長へ出向いて配付するなど、地域とかかわりを持てるような職員になってきている。

あとはまちづくり推進委員会の、これは周辺部が多くなるが事務局を持ってなかったところ、金城はこれまで多分持ってなかったと思うが、金城地域では各センターが事務局を持つような動きもできている。そういったことでまちづくりにもう少し積極的にかかわれるような体制になったかと思う。

変わらないところという先ほどから話している、社会教育、生涯学習の推進を変わずやっているし、人材育成もある。行政窓口機能なども継続している。センターによって取扱いが違うが、敬老乗車券販売なども、継続している状況である。

西田委員長

今お互いの意見を発表したのだが、公民館からまちづくりセンターへ変わったことについて、委員から執行部へ聞きたいことはあるか。

まちづくり社会教育課長

1点ほど。まちづくりセンターになったことで、何でもセンターでやってくれるのだろうと誤解をされている方もおられるようで、幾つかのセンターからそういう問い合わせが市民からあったと聞いている。その場では、あくまでも地域活動の主体は市民だという話もさせてもらいながら、その中でどうしても不足する部分についてはセンターで協力するという形で進めている。

西田委員長

意見交換で何かあるか。

芦谷委員

まちづくりセンター長とコーディネーターが会議をされて、い

ろいろ質問があったりして、明確に行政として具体的な方向を示しているか、それともよい具合にやってくれと伝えて終わっているのか。具体的な市の方針などは説明されるか。コーディネーターやセンター長に。

まちづくり社会教育課長

市の方針というかセンターとしての活動方針は年度当初にも説明しているし、研修の中でも。地域ごとに課題も違えばやり方も違うので、実態を踏まえた形でやろうと話しているし、毎月センター職員といろいろなことはするが、例えば事業計画の立て方の研修などをやりながら、地域の課題解決に向けた取組ができるような職員を育てるべく研修を行っている。

西田委員長

大体1項目を30分程度で進めて、最終的にまた意見交換をざっくばらんにしたい。次のテーマに行かせてもらう。

次は協働のまちづくりのゴールとは。まちづくりとはどういうものか、協働のまちづくりとは。明確にこれだと言うことはなかなか難しいと思うが。最終的にどういうところに持っていくのが望ましいのか。また意見を言ってほしい。意見交換は時間を取りたいと思うので。私はゴールをこう思うということがあれば挙手をお願いします。

柳楽委員

協働のまちづくりの考え方からすると、やはり地域の皆が課題解決を自分たちでやっていこうという気持ちになり、実際に実行していける。それがゴールではないかと私は思っている。

村木委員

私は、その地域だったり、まちづくり組織だけが協働ではないと思っている。三隅氏800年もそうだが、あの団体もあえて目的の中に協働のまちづくり理念を入れているのだが、主体がそれぞれ目標を持ってかかわっていくことがゴールかと思っている。地区まちづくり委員会だけではなく、スポーツもそう、スポーツも一つの目標を持ってやっていくことも協働のまちづくりだと思っている。それぞれの主体が目標に向かって動き出すこと、そして実現すること、それがゴールなのかと思っている。

芦谷委員

三角ベースボールということをやった。結局、公助が共助にしっかり支援して、共助を使って地域の協働のまちづくりなり、推進委員会をやってもらう。そのためにまちづくりセンターが大事である。一方公助は住民に対していろいろな支援をしながら、住民は共助に参加する。そういった三角形をうまく回すような仕組みが、どちらかと言えば行政は共助・自助を向こうに置いておいて、うまくやれという感じなので、ぜひうまく三角ベースボールでボールが回るようなイメージで。これがゴールである。

村武委員

ゴールはないかなと思っている。その地域の住民たちが、難しく考えるわけではないが、日々暮らしていく上で自分たちの困り事や改善点などを地域住民が考えて、自分たちでできることは自

分たちでやる、できないこと、行政にお願いする。そういったことを自分たちで考えていくことができる地域になったらよいのではと思う。

川神委員

結局は自分たちの周りのこと、地域のことは自分たちでやる。ずっと言われていたことだが、これに尽きると思っている。誰かにおんぶに抱っこではなく、自らがどうやってこの地で、誰かが誰かを助けるのか、その意識になれば間違いなく協働のまちづくりにたどり着ける。そのためにどのような組織、センターがそれを後押しできるか、風通しのよい仕組みができたときにゴール、目指すべき地点だと思っている。

岡本委員

単純につながることを考えている。私のところは1町内自治会長、おのおのが単独町内会長で、一緒になってこれをつなげよう、よそのつながったものをもう1回そこでつながろうということ。つながるにはどうしたらよいのか、助け合うにはどうしたらよいのかということでコーディネーターがいろいろアドバイスしてくれる。やはり防災関係で何かあれば一番困る、だからそういう面でつながろうということなので、ゴールはつながり。つなぐというキャッチコピーのもとにいろいろなことをやるほうが、まとめやすいかと思う。私はそこにゴールを求めたい。

西田委員長

私は、ゴールはなくて、人間が生活を営む、地域で生きていく間は全てが協働のまちづくりという言葉でつながるのではないかと思っている。それぞれの委員が言われたことと私も一緒なのだが、芦谷委員が言われたように自助・共助・公助の三角ベースボールの形、その中の仕組みとして長い時間軸の中の一つの節目で、協働のまちづくりで三角ベースボールの自助・共助・公助といったところを強調するときもあって。よいときと悪いときと、協働のまちづくりは全てが市民、行政も議会も含め、全ての人の意識の持ち方が、よい状態であったり悪い状態であったり。ゴールはなくて、ずっとこういう状態がよかったり悪かったりという、全ての市民の意識次第でよかったり悪かったりというのがずっと変化しながら、これからも永劫的に続いていくのではないかという気がしている。その中の少しよいところはゴールに近いところになるかもわからないが。その中で大事なのは意識が、自助・公助・共助の中の、自分のためではなく地域のため、他のためという意識の持ち方が非常に大事なのではないかと。そういうことによってつながり方も変わってくるし、意識も前向きになっていくし、いろいろなところでつながることと前向きになることと、意識の持ち方一つだと私は思っている。

上野副委員長

私もゴールはないと思う。ごく自然に地域の課題をセンターへ誰もが自由に持っていけるような状況をつくりたい。ある地域が

西田委員長

うまくやっている、それを月に1回全センターが集まって話をするので、だんだん地域がよい方向へ広がっていく。よい方向につながっていくことがゴールだと思う。

ゴールについてそれぞれ思いを発言いただいた。執行部から、何なりと発言をお願いします。

地域政策部長

協働のまちづくりのゴールということで、委員長をはじめ数名の委員から「ゴールはないのでは」という考えが出た。究極のテーマなのかと思っている。自治区制度から協働のまちづくりへ仕組みを変えるに当たっての議論の中で、協働のまちづくり推進条例を制定するときも同じように、協働のまちづくりを考えるに当たって何を指すのか、どうしたいのかが明確になってないと、目指すべき姿であったり、手法であったりがなかなか整理できないのではないかという議論もあったかと思う。協働のまちづくり推進条例に長めの前文をつくった。浜田市の背景、これまでの取組などを含めて。その中で、ゴールという言い方はしてないが、浜田市民、私たちの願いとして、全ての人が一体となった持続可能で元気な浜田、これも漠然とした言い方なのでゴールにはならないかもしれないが、そういったことに対して市民皆が参加して実現に向けて取り組んでいこうということで基本理念を定め、条例をつくって進んでいくよう整理しているので、そこに尽きるかと私は思っている。担当課から補足があれば。

政策企画課長

協働のまちづくり推進条例、令和3年4月に施行した。担当は政策企画課で行った。そのとき、「全ての人が一体となった持続可能で元気な浜田」これが前文にあるキャッチコピーのような言葉だと思う。この条例の第1条に、条例制定の目的がある。市民の皆と市の役割を明らかにして、それぞれがともに考え、行動し、誰もが幸せに暮らせる魅力ある地域社会の実現とある。第3条には、これの実現に向かって取り組むための基本理念も4点ほどある。こういったことで取り組むのに、なかなか私もこの条例、一言一句間違えずに言える状態でもないし、委員もゴールはそれぞれの意見があった。私も個人的に言えばゴールはないと思っている。ゴールは動いていくもの、また社会情勢も変わる。人口減少も進むことが予想される。その中で皆がそれぞれ地域課題を考えて、それを自分のことのように感じて動いていく。何から何まで行政任せだったり、議員に言えば解決という時代ではもうなくなってきているので、こういったことを自分たちもまちづくりの主役になって考えていくことが大事だと思っている。

ただ、条例にもいろいろあるが、ゴールはないといっても向かう方向性を皆で共有することは大事なので、浜田市が目指すまちづくりはこういうものだというのは我々が引き続き周知していき

西田委員長

たい。

浜田市に5万人の人が住んでいたら、ほとんどの人は5万人の中にまぎれて生活しているのではないかと。議員はある程度目立つ存在だし、いろいろ負託を受けて議員になっているので、そういう意味ではそれなりの動きをしないといけないので、どちらかといえば引っ張っていくほうの立場になるのだが、全体的には引っ張っていく人、引っ張られる人、あまり関心のない人などいろいろある。それが地域の形ではないかと思う。

村武委員

なかなかゴールというのは難しいと思うが、しかしやはり執行部としてはある程度目標を持ってないと進みにくいと思う。そういった意味では例えばまちづくり組織何団体を目標にしているかがよく出る。そこもまちづくり組織をつくることはもしかしたら協働のまちづくりに向けて必要なことかもしれないが、しかし地域によって合う合わないもある。私はまちづくり組織をつくってもよいが、それを何のためにつくるのか、皆で話し合っ、それならまちづくり組織をつくったほうがよいという話になればつくればよいと思う。それに行くまでの話し合いに地域の人たちを巻き込んで、皆で地域のことを考えていく。そこを丁寧にしていくことが大切かと思っている。

地域政策部長

3年かけて評価検証されると部長が言われた。今の時点で評価や検証をすることだけに捉われて、今度こうしようというのも乱暴な感じがする。

目指すべきところのイメージは定める必要はあると思う。そのために協働のまちづくり推進計画を定めている。これは市が取り組むことが中心になっているが、そういった目指すべき姿に向けて何をしないといけないか、計画期間中にどこまでやるかを整理したものもつくって進めている。

まちづくり団体の設立についても、理想は100%かもしれないが、現状は設立90%ということで目標数値を定め、そのために何をすべきか、どうしたらよいかということも進めるようにしている。90%にしているのは、地域によってこの3年間で全てできる状況になるかは不確定なので、それも踏まえて目標設定して、目標に向けて取り組んでいきたい。

岡本委員

私の地域が一番後れていることは再三再四言っている。皆に知ってもらってということと言われるのだが、知ってもらうのが難しい。町内が集まらない。コロナの影響もあって集まれないが。その入り口を皆に振り分けようとしても、皆が集まってこないからその話ができない。するとまずスタートは町内会長なので、その人たちに話していく。その人たちが皆を集めて話すかということ実はできない。だからどうしようかと。町内会長さんたちはわか

っているのだが、結局市職員が行き、コーディネーターが行き、地域課題は何かと町内会長に問いただして、災害の話が出たら災害のくくりで一緒になろう、一緒になるためには防災イベントをやろう、そして人が増えてくる、そのときに、働きかけるときにやっとな全体の、たとえば、大辻町など3分の1の方が来られた。町内がまとまっていけないと助け合いができないとやっとな理解してもらった。

浜田市は協働のまちづくりをやろうとか、こうしようとか、そういうところに入ってない。入る余地もない。ただ、動いていけばものが動くことを知ってもらわなければいけないから、そういうところが私らの地域課題だと思っている。

最終目標は三隅のような形、あれを目指していくようにしなければいけない。それは企画であったり。しかし事業なら石見でも浜田でもやっている。男の料理教室とか、いろいろなことはやっている。だから一番肝になる部分は、その地域が問題を意識して、企画していこうというところまで持っていくのが私らの最終目的だろうから、そのためにどうしたらよいかというと、一つずつまとめてつながって、上に上げてまたつながって、最後に全体地域の課題はこうしよう。例えば敬老会は私の地域では全体でやる。そこへだんだんとお年寄りが行けなくなったのをどうしようかという課題がある。そういうのを一つの問題にして、どのように支援するかといったことを話す。私らはまだ始まったばかりなので、そこに向けてこっちがよいからこうしてくれといった目標を立てられたら厳しいが、目指すべきものを掲げられたらそれは目指す。これにしてくれと言われたら厳しい。皆には理解してもらえない。私もどんどん働きかけをして、まとめてもらって、次の段階にはしようと思うが、まずはその仕掛け、優しい言い方、住民一人一人に理解してもらえるような文言も含め、仕掛けがあるとよい。

地域活動支援課長

岡本委員がおっしゃるように、浜田地域は現状に困っておらず自分で完結できるとなると地域でつながることが逆に負担になり、わずらわしさを感じるというのは十分承知している。私どもは地域の実情に合った支援ができるよう取り組んでいきたい。ただ、人口は減少し少子高齢化となってくる中で、10年後20年後を見据えた地域のあり方を考えてもらわないといけない時期に来ている。地区まちづくり推進委員会をつくろうとやって、すぐつくれるものではないので、時間をかけて取り組んでもらえるよう目標設定をしている。

協働という言葉、一緒になって取り組むという意味であり、手段の一つということだと思う。協働することが目的ではなく、目的があってそれを実現するために協働するという考え方が広まっ

西田委員長

ていくよう我々も努力しないといけない。

協働のまちづくりをいとなかなか集まりにくい、災害があったら命と財産を守るためにはどうしたらよいかとなれば、防災のまちづくりということで、皆が一緒になってつながる方向の話をしていく。それが結果的には協働のまちづくりになっていくのだろう。皆が関心のあるところから始めるのも一つの手法かもしれない。

柳楽委員

コーディネーターとの意見交換の中でコーディネーターが、地域内でできる人ができることをやるのがまちづくりだと言われた。それはすごくわかりやすい。それぞれいろいろな能力を持った方が地域にいる。自分ができることは地域のためにやっさいこうという気持ちが大変なのかと、話を聞いたときには救われたような気がした。

西田委員長

続いてテーマ3に行きたい。地域活動を推進するに当たっては人材育成がすごく重要だと。協働のまちづくりを持続させるためにも、住民ができることは一体何か、行政にはどういう役割があるか、議会はどういう応援の仕方があるか。それぞれ考えるのも大事だということ。人材育成について皆から意見を聞きたい。

岡本委員

私の地域での人材育成の入り口は、子ども育成会がベースだった。原井小学校、雲雀丘小学校をベースに考えたときに、PTAの保護者が悩むのが夏休みの球技大会であった。町内で組んで出るのに保護者はどういう形で世話するか、そこで世話役になって成長する流れがあった。しかしもう町内会の保護者がかかわるものはなくなった。子ども会がなくなったため次のリーダーが育ってない。だからすごく困っている。年末餅つきや夏のバーベキューをやって、保護者も呼んで、その中で皆と会話しながら役員抜擢している。

大辻では自主防災の際に3分の1の人が来られた中に、副住職がおられた。大辻町には偉人が多いので偉人をしのぶイベントをやりたいというので彼を紹介した。そのような人を一人ずつ引っ張っていくしか次のリーダーを育てる方法はないのかとと思っている。

まちづくりや、地域イベントにいろいろな支援を認めてあげて、いろいろな活動をしてもらって、それを見てもらって、そこから人材を引き上げる形で次の地域活動に取り組んでもらうというくらいしか、手法がないように思っている。とにかく私たちのところは1年か2年で町内会長が替わる。替わるタイミングで原点戻りしてしまうようなところがある。その人たちに残ってもらう努力をする一方、イベントの際にこれと思った人を育てる必要がある。

村木委員

配信した資料は自分が現職時代に公民館長と話した内容をまとめたものである。地域づくりとは「決められたエリア内で拠点と

機能を生かす人づくりだと考える」、どのような人づくりかという
 うと「課題解決に資する人づくり」、課題解決とは何かという
 「皆で地域課題について話し合っ共有し解決に取り組む」、な
 ど書いてあるとおりである。

資する人づくりとはと題して10項目くらい書いてあるが、こう
 いった人を公民館として担っていただくようにするにはどうい
 う事業をすべきか。もちろんサークルや研修、イベント、事業、そ
 ういった目的をもってやっていこうという話を館長とした際の資
 料である。

下にキーワードがある。「人づくり、つながりづくり、地域づ
 くり」ということで。やはり先ほども出たように、つながりづく
 りが大事だと思っている。最近是人づくりも大切だが、つながる
 という制度もある程度今後いろいろ考えていかなければならない。

西田委員長

簡潔にまとめられている。この中に凝縮されている気がする。
 私は、地域づくりは一人一人の人生づくりと思っている。人づく
 りはどうしたらできるだろうか。いつどこにいても人材育成はつ
 きまとうテーマだと思う。

芦谷委員

半分から8割くらいは後継者をつくるのが長の仕事である。セ
 ンター長に後継者を見つける仕事をしてもらうとか。行政が人材
 育成というと、必ず社会教育主事の資格を取らせる、まちづくり
 フォーラムをする、この二つである。

今、地域づくりに興味がない人は、地域づくりが物足りないか
 らである。ぜひそういう人たちに入ってもらい、自分たちの思う
 ような地域づくりをやってもらう。興味ない人はいろいろなこと
 がわかっているからしないのである。そういう人たちに入ってもら
 い、自分の思うように変えてもらう。長になった者は必ず後継
 者をつくる。

まちづくりのプロを呼び込んでやることは往々にあるが、それ
 は駄目である。まず地域には宮も寺も地域行事もあったりして、
 きちんとやっている。地域の文化を大きくすることをやらなければ
 いけない。

市の協働推進委員は恐らく会議をしてない。協働推進委員なり
 地区担当者に集ってもらい、現場を知っている職員から知恵を
 頂戴して、市の方向性を見極めるようなことも必要だと思う。机
 上でやるより現場に足を運び、現場のわかる人からいろいろな知
 恵・アイデアをもらってそれを具体化すればよい。

柳楽委員

先日うちのまちづくりセンターで料理教室が開催された。それ
 まであまり地域活動にもなかなか出なかったような方が、センタ
 ー長の熱心な声かけもあって、ちょっとずつ出られるようになった。
 今回の料理教室の声かけをされたときに「出ていかないとな」

というようなことを言われたと聞いた。やはりそういうところなのだろうと思う。少しでも地域行事に出てきてもらいたい、そういう思いがどれだけあるかが大きいのだろうと思った。

センター職員もそうだが、まちづくり組織の皆にも少しでも、これまで地域行事に出てなかった人をどうやって参加させるかを考えてもらうのが、まちづくりにつながる。そういう意識を高めていくことが大事だと思う。

行政がすることという研修などだが、そういうことだけでは難しいのだろう。議会としてとなると、市民にまちづくりをするに当たってこういうふうにしたらいいかの話や、個々がするとか、今度議会報告会があるので、そういった折に皆に伝えるとか。まず自分自身が地域で行動する。そういうところが議会として大事なのかなと思う。

川神委員

人材育成は四角四面に考えてもどうにもならない。水が器に合うように、常に地域に合った人材が要る。日本を背負うためにいろいろやるのも大事だが、今我々が欲しい人材は、地域を背負う人間である。それは地域行事や地域の人を通さないと人材は形成されない。その地域内の人に触れて、考えがこの地域に合うかどうか、自分にどうできるか、自分なりの研さんをしながら進んでいかないといけない。それを認めて地域内で一緒にやろうという人間がいないと駄目だろう。

長沢公民館の話をする、もう50年60年くらい町内運動会をやっている。だんだん減っているが、あのあたりの人材育成はそこを登竜門としているように思う。誰かを誘って、招集係から始まり、決勝係などいろいろな係をさせる。行けばいろいろな人間と話をする。反省会で飲む。次は何をしようかという話になる。結局は誰かが誰かを引っ張って来て、地域行事を通じて体感させることがないと、文書や考え方や目標だけでは人は動かない。一緒に汗をかき面白い思い、辛い思いをして、次どうしようかというところに初めて地域の共感が生まれ、人が育っていく素地ができるのだろう。誰に声をかけ引っ張るか、その行動が全てだと思っている。

上野副委員長

私の地域のまちづくりセンターは、子ども部会やいろいろな部会をつくり、その世話をするのが若い人である。また、年明けにある人がイノシシをたくさん獲り、食部会に相談したら男性料理教室が開催された。いろいろなかかわりを持つ場にしたらもっとセンターもにぎやかになるし、人とのつながりもできるし、次につながる話にもなろうかと思う。趣味をもっと幅広い人を集めることに利用したらよい。

村武委員

かかわりの場をつくろうと考えるのがセンター職員などだと思

う。それをどうやったらよいのかは、それなりのスキルが必要だと思う。そのために例えば社会教育主事の資格を取ったり研修を受けたりするのだろう。スキルを持って、いかに住民を呼ぶかを考えるのがセンター職員の役割だと思う。

岡本委員の話ですごくよいと思ったのが、若い方が活動しにくいところをわかっておられて、できるようにしてあげようと、上の方が受け入れる気持ちを持っておられること。空気づくりも日ごろの関係づくりが大切だと思う。そういった意味で、そのために活動したり事業をしたりするのだと思う。それが人づくりにつながる。

西田委員長

ここで暫時休憩としたい。

[14時 24分 休憩]

[14時 30分 再開]

西田委員長
地域政策部長

委員会を再開する。

地域づくりまちづくりに当たって人材育成が大事だと、皆の話にもあったし執行部も共通認識を持っている。協働のまちづくり推進計画にも人材育成という項目を掲げ、研修や情報発信も含めて入れている。この項目で、若い世代が参加しやすい機会づくりが必要だということで、いろいろなイベントや機会をとらえ、まちづくりセンターを拠点に活動し、人と人をつなげていくのが大事だと思っている。いただいた意見と同じ方向で進めていけたらと思っている。

地域活動支援課長

あまりよくない例として協働のまちづくりフォーラムと言われたのを、どのように受けとめてよいのかがわからなかった。人材育成するための研修会の一つの手法として、協働のまちづくりフォーラムがある。今年度は若者の意見をもっと知ってほしいということで、小中学生や若者会議のメンバーに発表してもらったが、来られた方は皆、若者がいろいろなことを考えているのだと感動されたと思う。協働のまちづくりフォーラムという名前がもしかしたら悪いのかとも思った。もっと親しみやすい名前だとよかったのか。先ほどの委員の話でも、興味のあるものでないと人は動かないということだったので、肝に銘じて取組を進めたい。

また情報発信には大変苦慮している。いろいろな方法で情報発信しているが、若者は情報過多になっており、その中から取捨選択しているのでこちらが発信しても届かないところがある。そういう点も工夫しないといけない。

まちづくり社会教育課長

先ほどの委員のご意見を伺う中で、公民館が今までやってきた「集う・つながる・活動する」というところがまさしく人材育成

につながっているのだと改めて感じた。センター職員もそういったことを心掛ける。地域課題もそれぞれ違うので、見極めながら事業計画を組み立て、課題解決のために人を集めることができるような研修も今後引き続いてやっていきたい。

今は研修で事業計画の立て方も改めて取り入れている。来年度はその研修を生かしながら事業計画を立てて、いろいろな方がセンターに集い、つながり、楽しく活動ができて人材育成が回るようやっていきたい。

西田委員長

人間、地域は究極の状況になったときは、つながらざるを得ないし、つながって協働しないと生活自体ができない。そういった意味では、まだ市民に余裕があるのかもしれない。東日本大震災後の南相馬市へ被災地支援に行った際、皆がつながっていることを強調する場面をよく見た気がする。

今日の意見交換会はなかなか不完全燃焼のような状況かもしれない。せつかくの機会なので、委員から執行部へ聞きたいことはないか。

柳楽委員

執行部から見て、まちづくりセンター化して以降、協働のまちづくりに対する意識の醸成度はどのように思われるか。

地域政策部長

協働のまちづくり条例を制定して、市民の意識がどの程度かを把握するために全市対象にサンプルを取るアンケート調査を実施した。その中では、まだまだ協働のまちづくりは浸透していないと感じた。中間検証でまたアンケート調査を行う予定にはしているが、全市的な統計調査は一度しかやってないので正確な推移は把握してない。しかし感覚的には意識が格段に上がったようには見えないというのが正直な受けとめ方である。

柳楽委員

協働のまちづくりということを意識してやってないが、そもそもそういう意識に近いものは持っておられる方も多分いらっしゃると思うので、アンケート結果が100%でもないかもしれないと今思った。

地域政策部長

おっしゃるように協働のまちづくりを意識したり、あえて理解してもらおうよりも、地域の中で一緒にさまざまな活動をするのが協働の意識づくりだと思っている。アンケートの取り方にも工夫が必要だとは思いますが、おっしゃるとおりだと思っている。

芦谷委員

よくあちこちのまちづくりフォーラムへ行くが、行っただけで終わっている。自分も含めて。浜田の地域づくりの見本は三隅地域だと。三隅地域が手本なら、よい点を抽出して、目標として各まちづくりセンターやまちづくり委員会に共有するなど、地域の背中を押す。ただフォーラムをやっただけで終わってないか。

地域活動支援課長

地区まちづくり推進委員会やまちづくりセンターは、それぞれ素晴らしい活動をされている。それは事例集として毎年まとめ、

村武委員

先般の協働のまちづくりフォーラムでも配布したり、ホームページからも閲覧可能にしている。よい活動を知っていただく取組もしてはいるが十分ではない。いろいろな機会を通じて広げていきたい。

地区活動をまとめてホームページにも載せているが、それを見るのは限られた方かと思う。もっと多くの方に知ってもらうことを考えてほしい。

ご存じかと思うが明日、人が育つ益田フォーラムが益田市で開催される。私も公民館職員時代から益田市のこういったフォーラムに参加しているが、毎年よく考えておられる。ぜひ勉強に行ってみてほしい。

岡本委員

自分の地域も来年にはまとまると思う。次のステップとして、このつながりを誰がどういう目的で。自主防災という位置づけが一番よいのだろうが、この地区のつながりは、まちづくりセンター長がやるのがよいのか、どう考えているか。私も個人的にはいろいろ協力しようとは思いますが。町内会によってつながりの動機が違うものを、つなげていくのはまちづくりセンター長がリードするのか、執行部がやるのか、コーディネーターがやるのか。まとまるまでのシナリオをある程度つくらないといけないと思っているのだが、考えはあるか。

地域活動支援課長
岡本委員

市側の話か。

つなげる方法として一番よいのは何か。あまり市が主体的になるとお金の話になり、最初からよそを向かれる。お金のためにやっているのではないと。自主防災だけでつながっていただけるのだろうか。市としてはどう考えているか。まちづくりセンター長にやってほしいならしっかり話をしなければいけない。

地域活動支援課長

テーマによって異なると思う。自主防災でつながっている地域もあれば、福祉系に興味があってつながっているところもある。地区まちづくり推進委員会ができてないところで町内会長が集まる場が何度もあると思うが、そこではキーマンになってくれる方を市側で抜擢し、市の執行部、コーディネーター、まちづくりセンターらが一緒に支援していった一つの形になっていくのがベストだと思っている。

岡本委員

自治会の会が力を出してくれるのかと思っているのだが、自治会と地域協議会とある。地域協議会は浜田市が指名する諮問機関で、自治協議会は会長が集まる。しかしここが意外とまちづくりにかかわってない。その人たちに本当にかかわってもらえるのだろうか。今までの経験で、自治協議会がそういうことについてある程度まとめようといった話し合いなり意識はあるのか。

地域活動支援課長

自治協議会と地区まちづくり推進委員会という二つがどうかと

岡本委員

ということかと思う。一緒になってされるところもあれば別々に動いているところもある。どちらかが構成団体になる形で。それは団体によってさまざまなので、またどちらも任意の会になるので、市から「こうすべき」とは言いにくい。

浜田まちづくりセンターを中心に人が集まる形を私は想像している。例えば殿町と松原がまとまってもよい。しかし私らのところは自主防災だけでまとまってよい。それでまちづくりはよいという話なのだろう。

敬老会などを仕切る福祉委員会は全体で会議がある。浜田まちづくりセンター傘下で。そこに福祉委員も兼務されている町内会長が出て、一本にまとめようと話を出したのに、いやどちらでもよいという声が出る。それが私には不自然に思える。

まちづくり社会教育課長

まちづくりセンター長が取りまとめるリーダーと言われた。確かにそれもだが、センターの位置づけとしてはセンターが主導でやってしまうと行政がやるという考えに向いてしまうのではと思ってしまう。そうではなくセンターとすれば、自分らは裏方に回って、浜田の中のキーマンを見つけてその方と数名とで連携していく方式のほうがよいと思う。

(2) その他

西田委員長

これはまだしばらく続きそうな気がする。そろそろ全体的にまとめる方向に行きたいのだが。執行部から今日の意見交換を通じてご意見があれば。

地域政策部長

今日はこういった機会をいただき感謝する。委員の考えも聞けたし、市の考え方、条例や計画の考え方や方向性をお話しできて有意義な時間だったと思う。

協働のまちづくりの推進については市も重点的に進めるということで、評価検証をしっかりとやっているし、そのためには今どこまで進んでいるのかもしっかりと見て整理していきたい。またこういった機会があればぜひ意見交換したい。

西田委員長

委員から執行部に聞いておきたいことはあるか。

(「なし」という声あり)

まだまだ思ったことの何分の1しか出てないのではと思うが、こういう機会をまた設けたい。執行部はこれで退席をお願いする。

《 執行部退席 》

2 中間報告作成について 【委員のみ】

西田委員長

今まで、意見交換や取組を始めて約1年経過したが。

河上局長

前の会議のときに、6月定例会議に中間報告をしようということ

とになっている。それに向けて協議していただきたい。それと併せて、ここには書いてないが今後は何をしていくかという2点だと思う。

西田委員長

中間報告については6月定例会議にて行うと決定している。中身については正副委員長と事務局とで、これまでのもろもろを整理してつくりたい。6月定例会議までまだ期間があるので、まとまったら皆に報告する。

芦谷委員

今後の取組については今までいろいろ意見交換したり、まちづくりセンターなどに伺いながら取り組んできたが、今後はどういう取組、活動をしたらよいか。ご意見があれば伺う。

岡本委員

どうしても総論になる。私は執行部の背中を押すという意味で具体的なことをしっかり盛り込んでいかないといけないと思う。今後は中間報告ができることを前提としながら、話をヒアリングする段階ではなく、もうすぐにでも行動を起こしたらよいと思う。

川神委員

そろそろまとめてこうしよう、とでき上がるものが、今後我々がやろうとすることにうまく着地すればよいが、全然違う方向に行く可能性もある。我々は地域の課題を見極めねばならない、研究しなければいけない。5年前10年前から見ても既に高齢化も少子化も進んで、それまでの感覚と全然違ってくる。もう少しその部分は研究したいと思っている。早急にやってしまったら後で何もできなくなる。

村武委員

先を見るとイメージは湧くが、確かに現時点でこれをこうしようというはっきりしたビジョンは皆ないのでは。2025年が少子化対策のリミットだと国が言っている。そこから加速度的に出生率が落ちてくる。つまりこの2年間で子どもたちをどうするのかという視点。今までは高齢者対策とか、元気で長生きで地域で高齢者を支えようといった活動をしてきたけど、地域でどうやって子どもを産み育てる環境をつくるかを改めて盛り込んだ視点を、協働のまちづくりに入れていかなければいけないような気がする。

柳楽委員

芦谷委員が言うように具体的なところを出していかないといけないかもしれないが、私も今の段階ではまだ難しいと感じている。1月にまちづくりセンター職員に向けた職員研修会が行われた。これは講師が島根県社会教育委員で、以前は安来の公民館主事をされて全国へ向けた事例発表されたような方なのだが、今は隠岐の西ノ島町に住んでおられ、県の社会教育委員をされている。その内容がすごくよかった。例えばオンラインで話を聴いたりできると思うし、もしかしたら月に何度かはこちらに来て社会教育委員活動をされているようなので、浜田にも来てもらったらよい。話を聞いてみたらどうか。

先ほど川神委員が言われていたように、子どもや若い人を地域

づくりに巻き込んでいくことが課題だと思う。地域の組織の中で青年部をお持ちのところはなかったらどうか。もしそういうところがあれば、そういったところの方と話をするのもよい。若い世代の地域づくりに近い団体、組織があれば、そういったところとの意見交換はしてみたい。

村木委員

今日聞くべきだったかもしれないし、岡本委員もおっしゃったが、そもそも地域コミュニティのあり方が地域ごとに違う。その実態ももう少し確認すべき。岡本委員は福祉委員が敬老会をされると言われたが、三隅は自治会がやる。福祉委員はまた別の役割がある。執行部の見解では統一する必要はないとされているが、やはり地域コミュニティのあり方がまだ腑に落ちてないと思った。

今日は三つのテーマだったが、一つに特化したテーマでもまた意見交換、資料提供でも構わないので、説明することがあってもよいと思った。

芦谷委員

地域コミュニティのあり方はよくわかるのだが、この特別委員会には任期がある。少子化問題、若い人、高齢化の見極めをするとか、社会教育委員だとか、もちろんよいのだが、私は今の段階でいろいろ出てきた協働のまちづくりにおける浜田市の課題、コミュニティのありようを含めて、具体的に出た問題について提言としてまとめたほうがよいのではと思う。

岡本委員

どこかで一つの区切りをつける。課題はあると私も言ったが、区切りという部分も意識しながらいかないと。着地点を早急に出すことについて意見が変わってくるが、それをやってもよい。

川神委員が言われた子どもという位置づけ。子ども会の話を見せてもらったように、ここは必要だと思う。この辺を意識しながら少し進めるという意見である。

西田委員長

もう少し他の民間団体含めて先進的なことをされている人材等との研修的な意見交換というか、リモートも含めて、そういったことをこの特別委員会としてはやったほうがよいというような意見にも受け取れた。

先ほど川神委員が言われた、私がこの間からずっと引っかかっていた、これは福祉環境委員会の所管になるかもしれないが、日本子育て支援大賞に2022年、三つの自治体を受賞された中の一つが岡山県奈義町で、行政も民間も子どもにかかわる応援を皆でやっている。特殊出生率が日本トップクラスで高いし、子どもにかかわって働きたい人の仕事のマッチングもすごく進んでいる。また若者向けの住宅建設、行政は行政ですごく子育て応援されている。特になかった先進地への視察も新年度になればありかと思った。

芦谷委員

そもそも協働のまちづくりは協働のまちづくり条例などその周

- 辺なので。少子化ももちろん大事なのだが、むしろ協働のまちづくりの推進体制や、協働のまちづくり組織などに限定しないと。あまりにも高齢化だ少子化だといえは広がりすぎる。
- 村木委員が言われたが、町内会、自治会、行政部など浜田内でもいろいろ違う。まず足元を整理するのも手ではある。
- 西田委員長 おっしゃるとおり。地域コミュニティのあり方というのが一つ大事なところで、浜田における地域コミュニティの状況を確認するのも必要かと思う。それを含めて今後の進め方なのだが。
- 柳楽委員 任期が2年なので、そこまでで一定程度のものを出したほうがよいという話があった。皆がそういう思いなのかをまず確認したい。そうであれば、どこぐらいまでのところできちんとしたものをまとめるかの目安も、共通認識として持たせていただければ。
- 西田委員長 基本的に9月いっぱいまではこのまま続く。
- 河上局長 特別委員会は、必要がある場合において議会の議決で置かれた委員会なので、委員会構成を変えるときに、やはり必要だとなればもう1回議決を受けて継続となるのでは。
- 西田委員長 協働のまちづくりはずっと続く。先はわからないが、このメンバーでは9月末まではあると思う。最低9月定例会議で何らかの報告はできると思う。
- 柳楽委員 9月定例会議中に一定程度のものを全議員の前で報告されることになるのか。
- 西田委員長 そういうこともできる。機運が高まって、この特別委員会はぜひ継続をと申し送りすれば続くのでは。まちづくりは生き物なので、そのときそのときをどう捉えてどう生かすか。中間報告をずっと続けていく中で、もしどこかで提言があるとすれば、例えば人材育成や生涯学習、何とか都市宣言のような大きいことを提言する可能性もなくはない。市全体が一つの柱をもとに変わっていくような提言をするのはよいと思う。そういう形まで成長していけば提言できると思う。そういう育て方をしていけないといけないのかもしれない。
- 川神委員 形として中間報告として示すのも一つの方法だし、協働のまちづくり条例などはずっと続くものである。どのような切り口でも続けていけないといけないものだと思っている。大事なのは市民のために協働のまちづくりをどのように進めていくのかという提言も一つだが、執行部と一緒にどう進めていくか。一番やらなければいけないのは、議会内部で協働のまちづくりはどうあるべきか、市民にこう説明しようということが議員自身にできること、まずはこれが目標だと思っている。そういった意味では今やっていることが議会議員に対してどうなのか。方向性などの報告をするのはよいと思う。当然それが終着点ではないので、そこ

西田委員長

から次にどう進めていくかは今からこの中で話していかないといけない。

ではこうしようというのがなかなか決まりにくいと思うので、次の委員会開催までに正副委員長と事務局がいろいろ考えてみるし、また委員もその辺についての意見をぜひ次回賜りたい。暫時休憩する。

[15時 14分 休憩]

[15時 28分 再開]

西田委員長
河上局長

再開する。局長から説明を。

先ほど特別委員会は常任委員会の改選と併せると間違っただけで、特別委員会は最初に与えられた課題があるので、一定のまとめができるまでとなる。特にいつ終わらねばならないというものはないので訂正する。それを踏まえて今後どうするか、検討をお願いします。

西田委員長

今後の進め方についてどうも行きづまりかけた。こういうときにはやはり初心に戻り、再度1年前を思い起こして、最初に委員からいただいた取組課題や進め方と、今日の意見交換を踏まえて、資料を新たにつくり、その中で今後の進め方について皆と協議したい。それでよろしいか。

(「異議なし」という声あり)

ではそのように進めていきたい。

3 その他

西田委員長

次回の日程についていかがでしょうか。

《 以下日程調整 》

今回は4月12日水曜日、10時からということでお願いします。以上で協働のまちづくり推進特別委員会を終了する。

[15 時 33 分 閉議]

浜田市議会委員会条例第65条の規定により、ここに委員会記録を作成する。

協働のまちづくり推進特別委員会委員長 西田清久